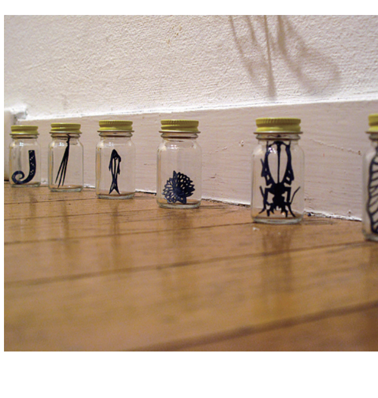
02 Graphic 第２回グラフィック「1_WALL」展 公開最終審査会 REPORT

Guardian Garden PRODUCED BY RECRUIT

1_WALL Hitotsubo next

2010年３月４日（木）18：00〜20：30
会　場／リクルート GINZA7ビル　セミナールーム
会　期／2010年２月22日（月）〜３月19日（木）



しっかりとしたコンセプト、完成度の高い表現、実験的な要素を盛り込みながら一本筋の通った作品がグランプリ

GRAND PRIZE
早崎真奈美　Manami Hayasaki

JUDGES

小阪淳（美術家）
佐野研二郎（アートディレクター）
服部一成（アートディレクター）
平林奈緒美（アートディレクター）
ヒロ杉山（アートディレクター）
進行：大迫修三／リクルートクリエイティブセンター クリエイティブディレクター
＜五十音順、敬称略＞

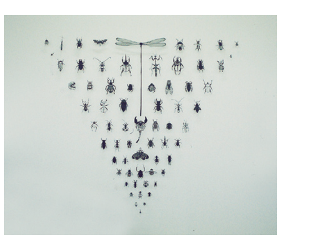
FINALISTS

■出品者のプレゼンテーションと質疑応答の概略

西本良太　Ryota Nishimoto
「霧」

日常的にはあまり意識して接することのない透明のプラスチック容器を切断し、紙ヤスリで削り磨く作業を繰り返して生まれた作品。質感が変化し別の姿になったが、元の素材がある程度分かるので、作品を見る人には身近に感じてもらえると思う。
〈質疑応答〉
●ヒロ：展示の照明が消えていたのはなぜ？また、作品の配置にはどんな意図があるのか？
○西本：展示会場で照明を消して決めた。中心が山のように盛り上がる配置にした。
●小阪：作品の容器を削り磨くのは、どこまでいったら自分の中で完成なのか？
○西本：元の容器から質感が変わるまで、紙ヤスリを使って手で磨いている。
●平林：一個一個の容器の削り方磨き方にムラがあるが、完成度としてどう思っている？
○西本：自分ではムラなく、しっかり磨いたつもりだが。

早崎真奈美　Manami Hayasaki
「Fool's Experiments －愚者の実験－」

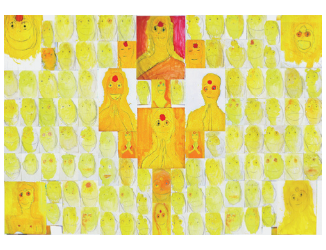


自然史博物館を訪れ、そこでの好奇心や違和感を表現しようと思った。まず、ダーウィンの進化論を理解するために『種の起源』を読むことから始めた作品作り。タイトルは、彼の本から引用したもの。この実験的な作品制作は新たな発見をもたらした。
〈質疑応答〉
●ヒロ：これはいつ作った作品か？　展示作品の瓶は？
○早崎：二次審査の後に制作した作品。タイトル通り実験というテーマで作った作品。
●佐野：切り絵の表現はずっとやってきたのか？
○早崎：日本の大学では日本画を専攻したが、海外に渡り、切り絵は有効な技法だと思った。
●服部：下に並んでいる瓶の作品は最初からプランにあったの？中に入っているのは何？
○早崎：種や羽根、葉っぱなどの自然物と、ピンやマッチなどの人工物を瓶に入れて対比させた。

LEIKA LEE　LEIKA LEE
「パンチラ☆ガール」

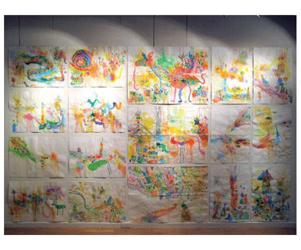
老舗40年のクラブでウエイトレスをしている。お店で仕事中にコソコソと、お客様が使用した後のコースターに絵を描くようになった。それは、時間に束縛されて生きる自分の一日一日の軌跡であり、自分を再認識する作業でもあった。ホステスなど女性がもつ処女性を表現した。
〈質疑応答〉
●佐野：いつもシャツに蝶ネクタイの服装だが？それから、作品はどこで描いているのか？
○レイカ：仕事が終わってユニフォームのまま来た。下絵はお店で、仕上げは家で描いた。
●服部：個展プランで漫画の作品を展示したいと言っていたが、これまでに描いたことは？
○レイカ：ない。これから１年の間に漫画の作品も描いていきたい。
●ヒロ：将来は何をやっていきたいのか？
○レイカ：絵では食べていけないと思っていたが、将来は絵で仕事をしていきたい。

湯沢恵理　Eri Yuzawa
「ひかりの僧侶はひとりひとりを守ってる」



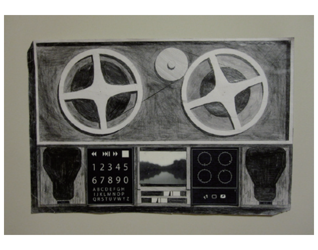
日々描き溜めたドローイング作品を集め、生まれて初めて“人とかかわりたい”と思って、そのために構成した作品。私の中から生じたエネルギーが作品を通して多くの人に伝わっていってほしい。個展プランは、私の頭の中にある世界を描いて会場を埋め尽くしたい。
〈質疑応答〉
●服部：ポートフォリオにある絵と今回の作品は画風が違うが、意識を変えているのか？
○湯沢：意識はほとんど同じ。絵によって技法が違うので、アウトプットが違う。
●ヒロ：絵を描くということは、あなたにとってどういうこと？
○湯沢：現実逃避かもしれないし、エネルギーを放出する作業かもしれない。
●大迫：この作品は他人に見せることを想定して構成したものなのか？
○湯沢：そうです。

おぐまこうき　Koki Oguma
「らくがきが咲いている」



いつも“自然に描く”という気持ちで作品を制作している。季節や空が移り変わるように、子供が笑ったり泣いたりするように、自分が感じる思いを絵に込めたいと思うから。日々旅をするように自然に描き、この作品を見た人がその人なりの感じ方をしてくれたらいい。
〈質疑応答〉
●佐野：下絵は描かずにいきなり絵の具で描いているのか？
○おぐま：下描きはしない。絵の具を垂らすなど、意識してはできないことが面白い。
●服部：“自然に描く”というのは、どういうことなのか？
○おぐま：自分が日々感じる気持ちが、季節の流れに似ていると思っている。
●大迫：画面の中に絵の具を垂らして、その偶然の中から形をさがしていくのか？
○おぐま：そういう時もあるし、最初からイメージしたものを描く時もある。

下野薫子　Yukiko Shimono
「VISION」



１年半前から作品作りを始めた。私の作品は「無」から創り出すものではなく、既にあるものを「翻訳」したもの。それをイメージによって表現したい。映画のシーンのように異なる色や素材を組み合わせることによって、言葉では表せないある感覚が生まれる。
〈質疑応答〉
●平林：今回の展示作品はどんなイメージで構成したの？
○下野：上部の黒と下部の赤、中央の骨のオブジェが最初に頭に浮かんだ。後は会場で考えながら展示していった。
●小阪：中央に吊ってある骨のオブジェの素材は？
○下野：家にあった古布を使った。素材や縫い方に特別な意味はない。
●佐野：作品を見た人に何を伝えたいのか？
○下野：ある感情を与えたいという意図はない。物の集まりによる反射を感じてほしい。

■審査員の感想

出品者のプレゼンテーションが終わった後、進行の大迫さんが「全体の印象として、出品者が作品を見られることをあまり意識していない。難しい審査になりそう」と感想を述べ、各審査員に全体的な感想を聞いた。佐野さん：「プレゼンテーションで『何かを感じてほしい』という人が多かったが、それは上から目線。『笑ってほしい』とか『頷いてほしい』とか、いかに意図して表現するかが課題。作者がどういうモノ作りを志向しているかが審査のポイントになる」。ヒロさん：「僕は作者が将来何をしていきたいのかが気になる。このコンペの面白いところは本人に会って考えを聞けるところ。今日の展示を見て、ポートフォリオとあまり変化がなく正直がっかりしている。現時点では１位も２位も白紙」。服部さん：「二次審査では展示への期待値で選んだ人が多かったが、期待ほどではなかったのが残念。今は評価されづらくても、魅力的な作品を作っている人にチャンスをあげたい」。平林さん：「今日展示を見て、ポートフォリオの段階からレベルが上がっていないのが残念。まだグランプリ候補は決まっていないが、将来一緒に仕事ができそうだなという人を選びたい」。小阪さん：「プレゼンテーションが上手な人が得で、下手な人が損とは限らない。僕自身、言葉で語りえぬものを大切にしているから。審査には１年後の個展への期待値も込めたい」

次に出品者一人ひとりに対する感想を聞いた。まず、西本さんについて。「照明を消した展示は失敗。作品にポートフォリオを見た時の驚きがなかった」と服部さんが言えば、大迫さんも「ポートフォリオの写真が醸し出す硬質な雰囲気が良かっただけに展示が残念だった」と同意見。佐野さんは「展示は作品点数が多すぎた。しかし、総合的なポテンシャルは高い」と期待を寄せ、平林さんは「ポートフォリオの作品はコンセプチュアルでオリジナリティがあり面白い。気づきのセンスも良い。今回は見せ方で損をしている」と展示を悔やむ。「指摘はほぼ同感だが、ちょっとしたキッカケですごく良くなると思う」とは小阪さん。「最初、展示を見た時、立体物なのに紙に描いたデッサン画を見ているような錯覚をした。この、これまでにない感覚は衝撃的だった」と援護射撃。レイカさんについて。ヒロさんが「かなり好きな作品。コースターという小さなスペースに描かれているところがポイントで、どこか昭和の匂いのする絵にも魅かれる」と言い、服部さんも「すごく良いと思った。絵もいいし、コースターという装置も含め、演劇を見ているような楽しさがある」と面白がる。佐野さんは「微妙なバランスで成り立っている作品に不思議な魅力を感じる」。おぐまさんについて。「本人は『自然に描く』と言っているが、かなりフォーマット化された絵だと思う」とヒロさんが作品とプレゼンテーションのギャップを指摘すれば、平林さんも「ポートフォリオには魅かれる作品もあったが、本人の言葉と作品が違った」と同調し、佐野さんも「絵も展示も単調で、見ていてドキドキしない」と残念がる。早崎さんについて。ヒロさんが「最初、展示してある瓶に気づかなかったが、気づいてから心が動いた。コンセプトもしっかりしているし、プレゼンテーションから本人の考えがしっかり伝わってきた。しかし、黒い紙の切り絵は新しい表現に見えなかった」と斬新さの欠如に触れれば、平林さんは「他の審査員が作品の瓶に気づかなかったのは信じられない。展示会場に入った瞬間に『あっ、瓶』と反応した。さらに展示を工夫すれば、もう一段良くなったかも」とアドバイス。「今回の出品作品の中では一番デザイン的であり、壁を立体的に使った展示がすごく『1_WALL』的だと思う」と佐野さんも総合的な完成度の高さを評価し、服部さんも「切り絵という手法が面白いわけではない。瓶の部分は手法を超えた良さがある」と全体のバランスを褒める。湯沢さんについて。ヒロさんが「本人のエネルギッシュさを感じてポートフォリオではかなり推したが、コミュニケーションビジネスで通用する人ではないと思う」と言えば、服部さんは「展示された状態では、意外とパッションを感じなかった」と指摘し、平林さんも「何もかも見る人にゆだねる作品で評価が難しい」と困惑する。下野さんについて。佐野さんが「どう見てほしいかを考えてスタートするのではなく、描きながら作品を作っているのが新鮮でもあったが、それでいいのか」と感覚的な作品の評価に苦しむ。ヒロさんは「出品者6人の中では一番作家性がある。しかし、スキル・経験不足のため本人のイメージを体現できていないのでは」とモヤモヤ感を抱く。小阪さんは「今回の展示の中では一番気に入った。脈絡がないものが並んでいることに不可解さを覚え、そこに魅力を感じた」と高く評価する。

■審査員による投票

出品者全員の作品について審査員が意見を交換し合ったところで、各審査員にグランプリ候補を２名ずつ答えてもらった。各審査員が挙げたのは……

小阪／西本　下野
佐野／西本　早崎
服部／レイカ　早崎
平林／西本　早崎
ヒロ／西本　レイカ

これを集計すると、
西本４票／早崎３票／レイカ２票／下野１票

「それでは、議論も出尽くした感がありますので、西本さん、早崎さん、レイカさんの上位3名の中から１人を選ぶとしたら誰でしょうか」と大迫さんが進行する。結果は、小阪さんが西本さんを、服部さんとヒロさんがレイカさんを、佐野さんと平林さんが早崎さんを挙げる。レイカさんと早崎さんが2票ずつを集めたところで、「では、西本さんを推していた小阪さん次第ですね」と大迫さんが小阪さんにレイカさんか早崎さんのどちらかに票を投じるよう促す。小阪さんはどちらも決め手がなく、すぐには決められない。「どうですか、最終結論です」と大迫さんが再度促すと、「個人的な作品の好みは、早崎さん」と小阪さんが結論を出す。「決まりました。グランプリは、早崎真奈美さん」と大迫さんが宣言して、審査会場が大きな拍手に包まれた。審査員の佐野さんからトロフィーを授与された早崎さんは、「ありがとうございます。『1_WALL』は絶対に獲りたくて仕方がなかった賞です。しばらくロンドンに行っていたのですが、日本で一度は個展をやりたいと思っていたのでうれしいです。今回を作家活動の幅を広げる良い機会にできるよう頑張ります。本当にありがとうございました」と力強く挨拶して会場を沸かせ、公開最終審査会が終了した。

■出品者インタビュー

西本良太さん：
「グランプリを逃した結果は残念でした。自分ではこれでいこうと思ったのですが、展示は難しいですね。審査員の方からいろんな意見を聞けたことが財産。出品してよかった」
LEIKA LEEさん：
「最終選考の2人に残って、とても緊張しました。結果は妥当だと思います。今回、審査員の方や他の出品者と話ができて、いろんな視点があることを知りました。今まで知らなかった自分に出会ったような気分です。この経験は必ず私の成長につながると思います」
おぐまこうきさん：
「自分の考えを言葉で伝えることの難しさを感じました。プレゼンテーションは考え過ぎてマイナス効果になってしまった。審査の過程でいろんな話を聞けたのは自分にプラスになりました。参考にして今後の作品作りに活かしたいと思います」
早崎真奈美さん：
「うれしいです。最後、2人になったとき、『私をグランプリにして！』と念を送っていました。日本や海外での学生経験や海外で作品を発表してきた経験が活きてきていると思います。常に新しいことに挑戦していたいと思っているので、今回の作品は与えられた時間やチャンスの中で、これまでやりたくてもできなかったことをやりました。日本で個展をやることに意味があると思っています。一年後の個展を楽しみにしていてください」
湯沢恵理さん：
ポートフォリオレビューで30名からファイナリストの6名に選ばれたのが信じられませんでした。それだけでもうれしかったです。自分の考えを他人に伝えるのは難しいですね」
下野薫子さん：
「言葉で自分の作品を説明するのは初めてでした。難しい面もあったのですが、自分の作品を見つめ直すいい機会になったと思います。この場を今後の新しい作品を創作していくためのきっかけにして、さらに上を目指したいですね」

＜文中一部敬称略　取材・文／田尻英二＞

■お問い合わせ先
株式会社リクルート ガーディアン・ガーデン　〒104-0061 東京都中央区銀座7-3-5リクルートGINZA7ビルB1F　TEL：03-5568-8818　FAX：03-5568-0512　http://rcc.recruit.co.jp/